



思いつくまへ

昭和三十九年、現在の「ふれあい広場」の場所に愛知県水産試験場内水面分場鳳来養魚場が開設され、此処で十七年間、冷水性魚類の試験研究に携わった。その間、眼下に見下ろす棚田を誰よりも多く、身近に見てきた。

当時は道路事情も悪く三本の轍（一本はオート三輪）に車の底は雑草を擦りながら走った時代で毎日の通勤はマイカーもなく徒歩であり、朝夕暇に任せて田んぼの数をした結果千二百九十六枚であった。まだ、その頃は大向の巫吉サや与良木の初男サは小さな田んぼの石を発破をかけ、木馬やモッコを使い「せまち」を行っていた。他にも竹の上から大向の間の草刈り場を食料増産のため田んぼに開墾していた。

昭和四十六年、国のコメ余り対策「減反政策」が施行、こんな急傾斜地の小さな田んぼにも制度が適用され、耕作者は試験場を常会の場として「俺の代に先祖の財産を減らすこ

とは罷りならん、懲役を喰らっても減らさん」等々と反発が大きく、喧嘩づくの常会が頻繁になされた。（舞）は常会が終わるまでは帰る分けにもいかず、当時の耕作者が先祖様の辛苦、田んぼへの情熱を貫く姿勢を、未だに於いても鮮明に覚えている。

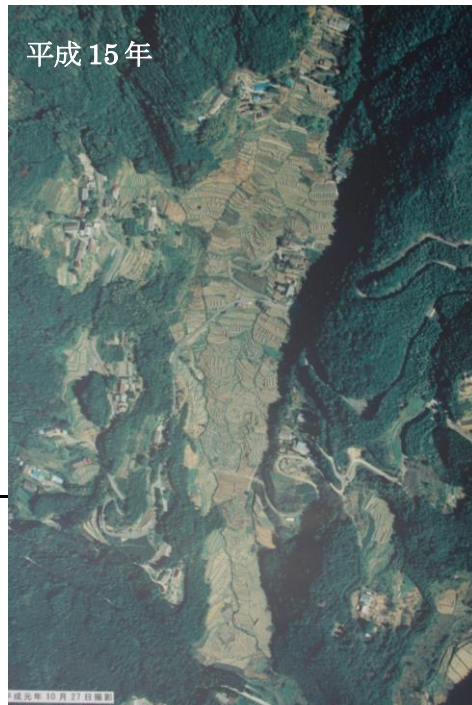
行政は「しきみ」や「花木、粟」など転用作物を奨励したものの、何一つ利益の上がった作物はなく、花木など成木に育て、出荷しても梱包費、出荷手数料等を取られる羽目で惨憺たるものであった。

怒って引き抜き、捨てた田んぼは「床土」が抜け、水持ちが悪く、再度の稲作は不可な耕地に様変わりしてしまった。転作で唯一息を継いだのは梅栽培農家程度であった。

よく、都市近郊から見学に来る観光客から、植えてない田んぼを見て「もったいない、なぜ、荒らしているのか？」など勝手な質問がある。《何をこくだ、好きで荒らしとる訳じゃあない、荒らすにやあ、荒らす



昭和 34 年



平成 15 年

家は減少の一途を辿った。

平成三年、三百七十三枚までに減少、地域の宝としての呼びかけが効をなし、平成八年には四百二十枚までに復元、現在に至っている。

昭和四十年初頭には水源の湧水も時間当たり七十二トンが噴出、大雨が降って一カ月近くなるとやつと増え、濁りを知らない恵まれた湧水であったが昭和三十年代の植林奨励で針葉樹（杉、ヒノキ）林化、木材の需要低迷から放置林化され降った雨も地表面を一旦水となり一気に流下、現在では時間当たり二十五トンまで減少。かつては千二百九十六枚の田んぼが現在四百二十枚であることは湧水も田んぼも共にバランスが保たれており、水騒動の心配もないかな、と思われる。

事情があったんだ、事も知らんで勝手な事をこく（言う）じゃあない」と腹の中では思っても、極力、口には出さないように心掛けている。
毎年二割の減反、それに経済成長が起因、働きに行つてコメを買つたほうが楽だと千枚田に限らず米農

ドローン騒動

過日、田んぼの畔草を刈っていたらウウウウーと平和な千枚田にパトカーがやってきた。何かと畔道にど座って見ていたら二人のお巡りさんが田んぼに降りてきて何やら若い衆から聞き取りを行っているではないか。

後々、地元のお巡りさんに「何だったんだ」と聞いてみたら、「ドローンを飛ばしているのを一般の観光客が10番をし、本署のパトカーが来たそう。最近、やたらとドローンが飛び交う。嫌々ながら百姓をしているのに上空をビーンビーンと神経を逆なでするような異音には辟易する。都市近郊から癒しを求めてやってくる連中にも、癒されないと不評だ。聞けば、国交省の許可証を見せ、役所か何処かで使ってもらえれば、とか、ネットで流して千枚田を有名にしてあげる・・・と勝手な解釈を主張する。こんな自然豊かな所まで来てわざわざやらんでも隣の家の軒先でも飛ばし、撮影してあげれば、喜んでもらえるか、嫌がられるか、と思うまでもない。また、生態系にも影響するであろうし、田んぼに落ちりゃあ、絶対に拾わせん・・・とまでの嫌われ物だ。

案山子

千枚田の二か所に案山子が愛嬌を振りまいている。

①麓の四阿横に日本郵便のカタログ通信販売「ふるさと小包」で(有)八雲だんごが製造する「千枚田五平餅」をイメージした案山子で、制作したチームTAKO(設楽町津具)は欽ちゃんの全日本仮装大賞に十年連続し、準優勝の実績もある評判のチームである。



八雲だんごさんは急峻で作業性の悪い棚田を守る耕作者に感銘、「何かでお役に立てたい」と余剰米(古米)に大きな付加価値を付けて購入していただいている。

②愛知東農協こども農学校(六十五人)が実習田近くにそれぞれの衣装をまとい鳥獣を威嚇している。

付近の農家は「効果がありやあいいがのん」と期待しているが、観光客は大勢寄ってくる。



今年の稲の出来ぐあい

違う視点からみて、田植時期の喝水を懸念されたが、恵まれた湧水で難なく田植を終えた。やれやれと一息吐いた途端、無数のトノサマガエルが彼方此方の田んぼで産卵、夜明けにはオシドリが定期便のように飛来して来て浮き苗がでて困った。挙句にシカが早苗をバリカンで刈ったほど丁寧に食べてくれた。

サルは出るし、イノシシやシカの被害も相変わらずだ。受粉・出穂までは天候に恵まれ、豊作をほくそ笑んだが、以降、史上稀な雨日和、日照不足で千枚田全体が一色の黄金色の晴れ姿は観れなかったものの、昨年の刈入れ時の長雨で稲が立つ

たまま発芽、ハザ掛けでも発芽したり、カビたりと泣くにも泣けないことを思えば「よし」としなければ・



稲刈り

九月十四日、豊橋調理製菓専門校
九月十八日、新城高校農業クラブ
九月十九日、鳳来寺小学校
九月二十三日、こども農学校

行 平成二十九年九月二十日
鞍掛山麓千枚田保存会
発 文 責 小山舜二